

はぎわら ひこしち  
萩原 彦七



げんざい はぎわらばし  
▲現在の萩原橋

あさかわ か あきがわかいどう はし はぎわらばし し あさかわ おお はし か  
浅川に架かる秋川街道の橋、「萩原橋」を知っていますか。浅川には多くの橋が架かっ  
ひと なまえ  
ていますが、人の名前がつけられているのはこの橋だけです。

はし はちおうじ せいしこうじょう せつりつ はぎわらひこしち  
この橋は、八王子に製糸工場を設立した萩原彦七が、ほとんどひとりでお金を出してつく  
はぎわらひこしち じんぶつ はし か  
りました。萩原彦七は、どんな人物で、どうしてこの橋を架けたのでしょうか？ これからみて  
いきましょう。

ひこしち

## 彦七のおいたち

彦七は嘉永3年(1850年)4月、相模国愛甲郡依知村(今の神奈川県厚木市)に座本作左衛門の三男として五人きょうだいの末っ子に生まれました。幼いころの名前は信吉といました。

12歳の時、愛甲郡中津村(今の神奈川県愛川町)の古着屋呉服質屋に丁稚奉公(職人や商人の家に住みこんで働くこと)に入ります。

数年後、最初の奉公先を飛び出し、高座郡当麻村(今の相模原市)の生糸商(カイコのまゆからとった絹糸を売買する商い)のもとに身を寄せます。そこで6年間修行を積んだ後、八王子町小門(今の小門町)の生糸商、初代萩原彦七の番頭(店でやとわれている人のかしら)になりました。明治5年(1872年)3月、その娘、隈の婿になって、「彦七」の名を襲名(親や師匠などの名前を受けつぐこと)しました。

故郷には、商売の好きな少年だったことをよくあらわすエピソードが伝えられています。～ある日、信吉が主人の留守中に店番をしていると、馬に竹でできたひしゃくを背負わせた行商人(商品を持って売り歩く人)が現れました。一本でも二本でもいいから買って欲しいといます。信吉は安くまけさせて全部買い取りました。戻ってきた店の主人に、勝手なことをしたとしかかれても「商品を安く仕入れて、高く売るのがなぜ悪い」と胸をはって、あちこちに売りさばき、利益をあげました。～



▲萩原彦七  
(『織物工業組合百年史』より)

## 萩原製糸工場と萩原橋

八王子は「桑の都」とよばれています。桑をえさにして育つカイコを飼ってまゆをとり、そのまゆから絹をとる養蚕がさかんだったからです。明治時代、生糸は日本の重要な輸出品のひとつでした。絹は日本の近代化を支えていたのです。明治政府も、質のいい生糸をたくさんつくって輸出するよう、企業や実業家に呼びかけていました。

彦七はそんな流れに乗って、明治10年(1877年)、南多摩郡中野村(今の八王子市中野上町)に萩原製糸工場をおこします。当時、中野村は桑畑が多く、糸をよるための水車をまわすことのできる湧き水も豊富だったので、工場を建てるのにいい場所でした。そのころ、八王子では手繰り製糸(手で糸をよること)が多かったのですが、彦七は器械製糸を取り入れました。

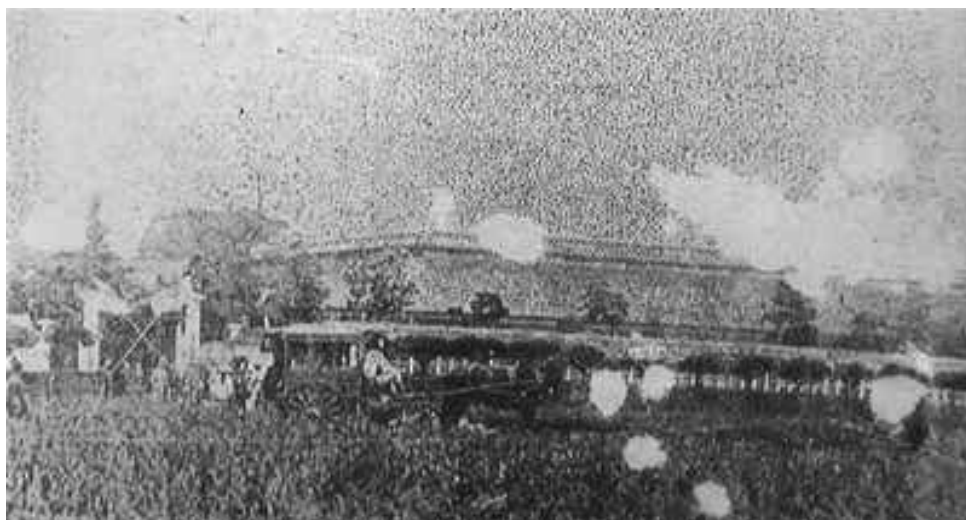
工場は年々拡大し、明治26年(1893年)には工場の中に養蚕伝習所という製糸を学ぶための学校をつくるなど、八王子の養蚕業に大きな役割を果たしました。

## 明治政府と殖産興業

江戸幕府が崩壊して、新しい明治政府が成立すると(明治維新)、日本はそれまで直接交流のなかった欧米先進国から、積極的に技術や文化を取り入れるようになります。

その一方で、大量に輸入されるようになった外国製品に対抗して日本の産業を守るため、国を挙げて産業力を育成する方針をたてました。それが「殖産興業」政策です。大規模な官営の工場を建設したり、外国の技術者を雇って新しい技術を教えてもらった。留学生を欧米に派遣したりしました。

当時のおもな輸出品であった生糸の生産も、この動きの中で手繰りから器械製糸へ、小規模生産から大規模な工場生産へと変化していきました。



はぎわらせいしこうじょう はちおうじしきょうどしりょうかんぞう  
▲萩原製糸工場(八王子市郷土資料館蔵)

工場が建てられたことで、八王子や横浜の市場で生糸の取引がさかに行われるようになりました。そうすると市場へ行くための道が必要になります。当時、浅川を渡るには、川原の中に板の橋しかなく、行き来するのがたいへん不便でした。そこで彦七は、必要なお金のほとんどを自分で出して、全長113m、幅4.5mの橋をつくりました。明治33年(1900年)のことです。当時は木の橋でしたが、昭和7年(1932年)に鉄筋コンクリートの橋に改造され、さらに平成2年(1990年)に補修工事を行ない、現在の形になりました。橋の欄干には織物に関する模様がデザインされ、また、橋の南側には記念碑が建てられています。

## 晩年の彦七

彦七は成功をおさめ、工場も発展していきました。しかし、明治33年(1900年)に生糸恐慌がおこり、生糸の値段が急激に下がり、前の年の半分にまでなっていました。同じ量の生糸をつくっても、収入は半分にしかならないのですから、養蚕業を営む人たちにとって大きな損害になります。彦七の工場も、たいへんな痛手を受けました。そして明治34年(1901年)、商売をつづけることができなくなった彦七は、自分の工場を信州(今の長野県)の製糸業者、片倉組に売ってしまいます。当時、片倉組は多くの資本家(商売をするのに必要なお金を出している人)に支えられていたので、不況の中でもなんとか生き残ることができました。

工場も養蚕伝習所もすべて失ってしまった彦七は、八王子を去りました。生まれ故郷の愛甲郡依知村にもどり再起をはかろうとしますが、結局うまくいかず、昔のような生活を取り戻すことなく、昭和4年(1929年)に80歳で亡くなります。

さみしくこの世を去っていった彦七ですが、その名前は今も萩原橋として、八王子の歴史の中にはっきりと残されています。

## しら 調べてみましょう

ひとつのテーマについて調べる時、何冊かの本を調べることは、とても大切なことです。次にあげる参考文献は、図書館にある本の中で、小・中学生のみなさんにもわかりやすいものです。自分で調べ、まとめてみましょう。市内のどの図書館に所蔵しているかは館内OPACで検索、または職員へおたずねください。

※☆印のついているものは、特に小学生におすすめのものです。

『多摩の百年 下』 朝日新聞社東京本社社会部／編 1976年

萩原彦七の遠縁の人から聞いた子どもの頃のエピソードなどを盛り込んで紹介されている。

☆『八王子 中野町わが街』 清水正之／編 1983年

萩原製糸工場があった中野町の歴史をわかりやすく紹介している。

萩原橋についての説明も詳しい。

『絹に憑かれた男たち』 畑中繁太郎／著 1985年

萩原彦七、渋谷定七ら、絹関連の事業などを通して八王子の歴史に名を残した人たちの伝記。

『八王子織物の百年』 八王子市教育委員会／編 1968年

八王子の代表的な産業である織物の歴史や、染色、織りの手法などを解説している。

織物について詳しく知りたい人におすすめ。

『八王子織物史 上巻』 正田健一郎／編 1965年

八王子織物の歴史を広く資料を集めてまとめている。

『八王子織物工業組合百年史』 八王子織物工業組合／編 2000年

八王子の織物工業組合の創立百年を記念して、組合の歴史をまとめている。

『糸縫車』 畑中繁太郎／著 1991年

八王子の繊維業の歴史をまとめている。

【参考】生糸や絹についての本

☆『カイコの絵本 そだててあそぼう19』 きうちまこと／編 1999年

カイコの飼い方や生糸はどんなふうにつくられるかをわかりやすく説明している。

☆『真綿』 日本真綿協会／編 2004年

養蚕の歴史をわかりやすく説明している。

編集・発行 八王子市中央図書館

平成22年(2010年)12月

令和4年(2022年)12月 改訂